

シンポジスト/募集句選者

宮部みゆき みやべ・みゆき

1960年、東京都江東区生れ。法律事務所などに勤めながら小説を書き始め、1987年「我が隣人の犯罪」(オール讀物新人賞)でデビュー。以降『龍は眠る』(日本推理作家協会賞)、『火車』(山本周五郎賞)、『蒲生邸事件』(日本SF大賞)、『理由』(直木賞)、『模倣犯』(司馬遼太郎賞・芸術選奨文部科学大臣賞)などのミステリーをはじめ、『本所深川ふしぎ草紙』(吉川英治新人賞)、『ほんくら』などの時代小説、『ブレイブ・ストーリー』などのファンタジーほか、多彩な作品を生み続ける。稀代のストーリーテラーであり、現代を代表する作家の一人。近年は俳句への関心を深め、句会に参加して句作に励むほか、月刊誌『俳句』に俳句を素材とした短編小説「ほんほん彩句」シリーズを不定期連載。2020年に電子書籍として『ほんほん彩句』を期間限定で特別配信した。

夏井いつき なつい・いつき

1957年生れ。松山市在住。8年間の中学校国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。俳句集団「いつき組」組長。創作活動に加え、俳句の授業「句会ライブ」、「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。TBS系「プレバト!!」俳句コーナー出演などテレビラジオでも活躍。松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」、朝日新聞愛媛俳壇、愛媛新聞日曜版小中学生俳句欄、各選者。2015年より初代俳都松山大使。2018年第44回放送文化基金賞(個人)、2019年テレビ愛媛賞、2021年NHK放送文化賞。句集『伊月集 龍』(朝日出版社)、『伊月集 泉』(朝日出版社)、『世界一わかりやすい俳句の授業』(PHP研究所)、『おうちde俳句』(朝日出版社)、『俳句ことはじめ』(ナツメ社)『2021年版365日季語手帖』(レゾンクリエイト)など著書多数。

神野紗希 こうの・さき

1983年、愛媛県生まれ。高校時代、俳句甲子園をきっかけに俳句を始める。2002年、第1回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞。2020年、第11回桂信子賞。現代俳句協会青年部長。明治大学・聖心女子大学講師。句集に『光まみれの蜂』(角川書店)、著書に『日めくり子規・漱石』(愛媛新聞社、2018年、愛媛出版文化賞大賞)、『もう泣かない電気毛布は裏切らない』(日本経済新聞出版社)他。

当日句選者

白濱一羊 しらはま・いちよう

1958年、奥州市生まれ、盛岡市在住。1993年、『樹氷』に入会し、小原啄葉に師事。1999年、「俳句一燃えつきる詩型」で岩手芸術祭賞を受賞。2007年、第1句集『喝采』を刊行し、翌年、これにより俳人協会新人賞受賞。2011年、『樹氷』主宰となる。現在、俳人協会評議員、岩手県俳人協会会長、岩手県俳句連盟会長。NHK文化センター、テレビ岩手アカデミー講師。

照井 翠 てるい・みどり

1962年、花巻市生まれ、北上市在住。1990年『寒雷』に入会し、加藤楸邨に師事。2002年、現代俳句新人賞受賞。2013年、第5句集『龍宮』により俳句四季大賞、現代俳句協会賞特別賞受賞。俳誌『暖響』『草笛』同人。現代俳句協会、日本文藝家協会、日本ペンクラブ各会員。現在、現代俳句協会賞選考委員。句集に『雪浄土』『泥天使』など。評論集に『鑑賞 女性俳句の世界』(共著)。エッセイ集に『釜石の風』。

高野ムツオ たかの・むつお

1947年、宮城県栗原市生まれ。阿部みどり女、金子兜太、佐藤鬼房に俳句指導を受ける。2002年、鬼房の意を受けて俳誌『小熊座』主宰を継承。2014年、第5句集『萬の翅』により読売文学賞(詩歌俳句賞)、蛇笏賞、小野市詩歌文学賞を受賞。その他句集に、『陽炎の家』『鳥柱』『雲雀の血』『蟲の王』『片翅』、著書に『時代を生きた名句』『語り継ぐいのちの俳句』『鑑賞 季語の時空』がある。当館館長。

鬼剣舞

北上・和賀地方に伝わる念仏剣舞の一種。国指定重要無形民俗文化財。鬼の面と独特の衣装を身につけ、悪霊退散・衆生済度の祈りを込めて刀を手に勇壮に舞う民俗芸能。角を持たない鬼は仏の化身。宗家としての岩崎鬼剣舞以下、市内12、県内2、県外4、計18団体の踊り組が、伝統をいまに伝える。なお、北上市内にはテーマ博物館・鬼の館があり、詩歌文学館賞の正賞は鬼剣舞の木彫り面である。